哲学研究
第五百八号　第四十四巻　第二冊

# ホワイトヘッド『過程と実在』への序説（承前完）

ジョン・D・ゴヒン
野田又夫訳

## 第七章

ホワイトヘッド自身、自然における形相すなわち永遠的客体の役割りを大いに強調してはいるものの、究極的な存在論的事実は、やはり、具体化の過程における原子的個体なのである。* 永遠的客体は結局のところ事実の構成要素にすぎないのである。事実は、先行する世界から派生する感受の巨大な多様を統一にもたらすところの自己形成的活動である。一つの現実的存在の内的な自己形成は、その現実的存在の宿す「自己超越的主体」(subject-superject) によって支配される。そして、現実的存在が自己を形成する質料となるものは、他の多くの現実的存在からの影響の感受の多様である。これら感受の内容が、「原始的所与」(initial data) である。これらは感受として把握主体の「内」にある。

* この章は主として『過程と実在』第三部第一章から第四章までの解釈に関係する。

それら多くの感受が主体のうちにあって、一つの目的の支配を受けている、ということをも注意せねばならぬ。だからこそホワイトヘッドは次のように主張し得たのである。「さまざまな感受は、その感受者をその目的原因として目指す（The feelings aim at their feeler, as their final cause.）」（『過程と実在』三三九頁）。さらにまた、自己超越的主体は何か「外的な作用者」ではない。自己超越的主体は一つの目的的成果であり、目指された統一であり、目的として感知された統一である。主体は原始的所与の目的原因であって、原始的所与は主体なしには存在しないのである。

かくして一般に先行世界の「エネルギー」は、目的的成果として、すなわち実現された現実的存在として、現在の世界のうちに実現される。けれども、統一を達成したまさにその瞬間に、現実的存在は自らを超える「自己超越的」（superjective）機能をあらわし始め、新たな具体化の活動における原始的所与となる。過程の連続性は、現実的存在の、この自己超越的主体という性格に基づいて成り立つのである。

原始的所与と具体化の統一との間に（もっともこの両者の区別は観念上の区別であって実在的区別ではない）、存在論的複合性の程度によって分かたれるいくつかの層（位相乃至は面）がある。これらの層は、一つの現実的存在の構造の中で、諸々の「範疇的制約」に対応している。範疇的制約とは、現実的存在が多様の複合によって生じた統一と考えられる時、その統一作用において働いていると想定せねばならない諸条件のことである。（但しわれわれ範疇的諸制約をここで詳しく論じようとするのではない）。さて、感受の統一の実現の第一歩は、めざす統一とは両立しない多くの感受を除去することである。* 達成せらるべき（或は達成せられつつある）統一は、その感受の統一において受け容れられないものを除去する。これが「否定的把握」であって、それをホワイトヘッドは、因果的影響の多様を秩序にもたらし目的の実現に適応させるためには不可欠な条件である、と認めている。すなわち、感受として両立し得ない諸要素の否定は、多様な影響の世界の中で特定の現実的存在が「確定」されるためには不可欠なのである。そしてこのとき主体の統一が「感受」の「美的」（aesthetic）調和という考えに支配されている点が、注目される。

（そういう調和の例は、たとえば「一つの型に統一された諸々の感覚所与」であり、この場合型の複合の程度は様々でありうるのである）。

＊　『過程と実在』二二五頁。『さて、さまざまな感受は、元来の意味で「両立し得る」か「両立し得ない」かであるところの存在である。「両立し得る」と「両立し得ない」という語の他のすべての用法は派生的である』。それ故、論理的な両立不可能性は上述の根本的な種類の両立不可能性に基づいているのである。

次の存在論的「層」は、ある意味で上のように原始的所与をきりつめた結果である。何らかの美的統一が目的として支配することにより（そういう目的は無数にある）、一つの現実的存在に与えられた世界は、全宇宙に対する一つの「展望」（perspective）となる。この展望は、その現実的存在の本質が何であるかによって、種々なる程度に制限されたものとなる。これをホワイトヘッドは「客観的所与」（objective datum）と呼ぶ。それは当の現実的存在にとっての「公的事実の世界」である（『過程と実在』三三八頁）。それは達成すべき統一に、いわば寸法を合わせるために、切り揃えられた世界である。

「客観的所与」は、当の現実的存在によって現実に世界について感受せられたものである。それは「原始的所与」を或る型のうちに統一したものである（『過程と実在』三五二頁）。ところでわれわれはホワイトヘッドが一般に「型」という語を、永遠的客体あるいは形式の意味に用いていることを知っている。従って、客観的所与とは、世界が現実に主体によって感受せられる形式なのである。それはいわゆる「客体的実在性」（realitas objectiva）、言い換えれば、主体によって受け入れられている客体的世界である。それは、さきにわれわれが「永遠的客体から成る客体的種」という表現の下に認めたところのものなのである。ただし、その客体的種が、達成すべき目的の支配の下で感受せられているのである。

これまでのところ、われわれは「客体的所与」を、環境から受ける多くの個別的な影響を主体が切り捨て単純化す

ることによって生じた結果であると考えた。この過程を通じて心的極が、目的原因として、達成せらるべき統一の要素たるべき永遠的客体を用いつつ活動している。*この「観念的感受」(conceptual feeling) は、あらゆる現実的存在において具体化の過程を条件づけている（それが如何に力弱いものであろうとも）。単純な現実的存在においては、達成された統一を示す「観念的感受」は、客体的所与に「順応的」(conformal) である（『過程と実在』三七五頁）。そのような観念的「登録」(registration) は、一つの歴史的径路における具体化の以前の瞬間の姿を現わすのである。それは過去の単純な再現である。

＊『過程と実在』三八〇頁。「心的極はそれ自身の具体化の決定者として、主体を導入する」。

物的極と心的極との間におこる具体化過程において、心的極が、過去の再現という単純な過程に含まれる永遠的客体とは違った永遠的客体を新たに持ち込む可能性がある。ある主体にとって、それの内的総合のために「ある程度手近な」(more or less approximate) 他の永遠的客体がありうる（『過程と実在』三八二頁）。（このことの説明は次章で問題にするであろう）。すなわち、心的極は（観念的感受として）、物的極に厳格に順応する感受において示される永遠的客体とは違った永遠的客体を思い浮かべることができるのである。その結果、過去から派生する観念の（順応的な）感受と、「新たな」要素との間に、「対比」(contrast) が生ずる。*ここにおいてわれわれは、最終的感受に対する「所与」が、その最終的感受（主体的形式）のうちにとり入れらるべき、新たな要素を含むに到ったということができる。このようにして主体は、過去とは違った本性を獲得し、それを未来に伝えることができるのである。

＊「範疇的制約第五」に従ってである。「この範疇によって新しさが世界に現われるのである」（『過程と実在』三八一頁）。

ホワイトヘッドはしばしば、その観念の感受において過去を再現している単純な型の現実的存存を、自然におけるエネルギーの伝播の最低の形式と同一視している。そのような現実的存在の主体的形式は、ホワイトヘッドが忌避や好みと名づけている美的感受である。これらは、エネルギーの伝播の強度を、否定的または肯定的に規定するところ

の、感受の原始的形式なのである。新たな永遠的客体が主体の美的感受を現実に条件づけているような現実的存在、あるいはそれらから成る社会の場合には、ホワイトヘッドは有機体の単純な適応（欲求）（appetition）のさまざまな例を採り上げたつもりなのである（『過程と実在』一六二頁）。生命の進化において、主体の美的感受に影響するこれら形式のいくつかは、一つの歴史的径路における恒常な要素として後に伝えられるのである。

すでに見たようにホワイトヘッドは、「原始的所与」の多様が、或る主体的形式における統一のために、きりつめられて、一つの現実的存在のもつ「展望」となる、と考えている。すなわち、多様は、ある種の成果（「主体的目的」）に導くところの或る型を帯びるのである。（この過程は勿論、心的極を通じて、新たな永遠的客体が侵入することにより、「攪乱」されうる）。このように多様な影響を切りつめることは、主体の肯定的感受と否定的感受とによって、なし遂げられる。肯定的に受け容れられたものは、それに対応する観念と合一して、客体的所与となるのである。しかしながら、そのように感受された要素は、以前より切りつめられてはいるものの、原理的に言えば、やはり多様である。そこで、主体的経験（「表象の直接態」）が、客体的所与に見出される多様な要素に比して、一層進んだ、しばしば思い切った単純化である、という事実を考慮に入れると、更に違った範疇的条件が必要となる。それが第六の「変形」（transmutation）の範疇であって、それは所与を、ただ一つの永遠的客体によって規定されたものに変形するのである。ホワイトヘッドの考えでは、多様な所与あるいはその一部が、観念的に同一の永遠的対象によって登録される場合に、上のような変形は当然起こらねばならぬのである。そこで「多」なる観念的要素は、いわば「一」として読まれる。言い換えれば、「多くのものを公平に指示する一つの観念の感受」*となる。その結果は、多者の非常な切り下げであって、ホワイトヘッドの考えでは、そのことは意識的知覚経験の段階よりも遙かに低い段階の自然において起こっているに違いないのである。

＊『過程と実在』三八五頁。「その結合体（あるいはその一部）は、このように規定されて、把握主体のいだく一つの感受の

客体的所与となる」（同上書三八四頁）。ここでホワイトヘッドは、単に「客体的所与」（objective datum）と書く代りに、「統合された客体的所与」（integrated objective datum）と書くべきであったろう。この点については三九三頁参照。「不明確性は変形された感受に基づいて生ずる」三八七頁。

伝統的哲学のいう「第二次的性質」は、上のような「変形」の現象が現われる場合に、いつでも自然の中に現われる。第二次的性質は、一つの現実的存存の、ある条件（たとえば肯定的把握）の下での統一作用の結果である。しかし、そのような変形の過程は、心的極を通じて新たな永遠的客体が客体的所与の解釈のために入って来るとき、「逆転」によって複雑化されることがある。そこで、物的極に与えられる所与と、心的極に生ずる諸要素とにより、主体的形式の統一の実現（実現された現実的存在）は、非常に多くの違った形をとりうることになるのである。

さて、このような議論をもとにして、もう一度「命題」を見直そう。意識的な知覚がその始発形式を、表象の直接態、言い換えれば物的極の観念的感受ないしは評価、において有するように、意識的な知的感受はその始発形式を「命題的感受」（propositional feeling）において有する。命題的感受の成立条件は、心的極とそれの客体的所与に対する関係とについての、われわれのさきの考察によってすでに与えられている。命題的感受は心的極の内容をなす永遠的客体が、単なる「それ」（it）として感ぜられる物的所与の、可能な述語として感受せられるときに、出現するのである。すなわち、観念的所与（述語の型）は、物的極との直接な結びつきから解放せられるのである。そしてそういう結びつきの関係の中断すなわち停止（epochē）の感受が現われ、物的極は、単に一つの論理的主語としてのみ保持されるのである。

こういう種類の感受によって、「真」及び「偽」に対して、意識以前の、乃至は知性以前の、あり方、がホワイトヘッドの存在論では与えられている。命題のうちに「感受への誘い」（lure for feeling）として含まれる述語は、それらの主語について「真実」（authentic）であることも真実でないことも可能である。事実、特殊な条件の下におい

ては、命題は「想像的」感受の対象でありうる。* けれども、想像的感受の命題は真でありうるのである。このようにして、命題的感受は、意識よりも低い段階にあって「知的」感受の姿を予示しているのである。

* 『過程と実在』四〇三頁。想像的感受の所与であるような命題の場合には、「述語の型」はその論理的主語とは違った源から得られていて、しかもその主語に帰属させられているのである。このことは、意識の段階では直観的判断の基礎となる。

知的感受がいかにして起こるかを具体的に示すものとしての命題的感受の重要な一例は、「知覚的感受」(perceptive feeling) である。「知覚的感受」はそれ自体では意識を伴わない。知覚的感受においては、述語の型は論理的主語と一つになっており、論理的主語は、それが物的に感受される姿において、述語の型の性格を示しているのである(『過程と実在』四〇〇頁)。このような場合に、知覚的感受は「真実」で、「直接」である。

すべての意識は、「比較」の感受("comparative" feeling) の一形式である。すなわち、命題としての (単なる可能性としての) 命題と、物的感受に与えられる「事実」(matter of fact) との間の「対比」の、比較的感受なのである。単純な知覚的感受に対しては対比ということは現われない。そこでは述語の型は論理的主語と直接に統一せられている。しかるに意識的な知覚においては、述語の型と論理的主語との相違そのものが感受せられ、その故に意識的となっているのである。そして、意識的な対比の基礎として、一つの「真実」な関係が成り立っている場合、感覚的経験は、ヒュームのいう「印象」のもつ「力と生気」を備えている(『過程と実在』四一一頁)。実際、「力と生気」は、真なる知覚の証拠である、とホワイトヘッドは考えている。しかしながら、客体的所与または観念的所与のうちに起こる「変形」や観念的「逆転」によって生ずる、複雑化は、考慮されねばならないであろう。そういう複雑化が「真実ならざる」(unauthentic) 知覚の源となりうるのだからである(『過程と実在』四一一—二頁)。たとえば「変形」の結果、或る「述語の型」が、客体が「事実上」有する重要な性質を、いわば覆い隠す、ことがありうるのである。

意識的知覚は無意識的知覚「経験」を基礎とする。無意識的知覚経験は、あらゆる現実的存在のうちに見出される

物的極と心的極との基本的な関係、を基礎とする。意識的知覚は、すべての知的感受とひとしく、感受または感動の複雑な様態であって、その基礎には自然全体に通ずる諸条件が前提せられている。そして、あらゆる生起を特徴づける内的統合作用は、それが単純な場合も複雑な場合も、「価値づけ」(valuation) の形式に従っている。*われわれは次章において「価値づけ」のいくつかの面をとり上げるであろう。

＊『過程と実在』三八〇頁。「観念的感受の主体的形式は価値づけである。心的極とは理想としての自己を価値づけの永遠的な諸原理に従いつつ決定する主体である。しかも、それら価値づけの原理は、心的極自身の物的客体的所与に適用されるにあたって、自律的な変容を示しもするのである」。

## 第八章

『科学と近代世界』の中の、神についての有名なしかし短い一章は、それに先き立つ諸章における理論的な吟味によって殆んど全く準備されていない。しかし、その前の抽象に関する章の中でホワイトヘッドは次のように言っている。「一々の現実的生起に固有な限定と区別された、あらゆる現実者の基底にある、これら一般的限定を考察することは、神に関する章において更に充分になされるであろう」(『科学と近代世界』二三二頁)。この言葉は、空間時間的連続が、「一層抽象的な可能性」をもとにして考えると、任意性をもつ限定である、という議論の連関のうちで発せられている。現実者と無限な抽象的可能性との対比というこの存在論的状況は、ホワイトヘッドの形而上学における神の観点の起点である、と考えてよいであろう。

＊　この章はホワイトヘッドの神についての説に関係するごく小数の主題を取り扱う。それは『過程と実在』第五部への序説と考えられてよい。

神に関する章の始めに、アリストテレスの形而上学において示されているような神は、「宗教的目的に役立つ神」

ではないであろう、という指摘がある(『科学と近代世界』二四九頁)。そして、この章の残りの部分は殆んど全く、形而上学的な神の意味を明らかにすることにのみかかっている。様々な宗教の神についての短い言及がただ一つあり、それにおいてホワイトヘッドは、神の形而上学的性格以上に神について知られうるすべてのことは「特殊な経験」に基づくと主張している。* この提言に対する説明は何もなされていない。この章は最後にキリスト教の神に言及している。しかしながらそれは、神を全能で完全なものと考える形而上学の考え方に反対しているのである。このような「形而上学的な讃辞」を受けている神は、過程を支配する形而上学的神と両立しうる神ではない、とホワイトヘッドはほのめかしている。**

* 『科学と近代世界』二七五頁。ホワイトヘッドの言おうとするところは、形而上学的神は、個人的経験を通じて具体的な宗教的意味を与えられ得る、ということであるように思われる。後に見るであろうように、『過程と実在』は、この個人的経験に対する基礎を確立するのである。

** 一九三七年十二月十九日の講義。「個人としては私は次のように考える(それは特殊な考え方ではあるが)。すなわち、伝統的キリスト教神学のいろいろな解釈かどうあろうと、厭うべき世界を眺めながら全く幸福であるような神を、神学が述べているのは、「永遠的存在」について想像しうる最も無礼な見解であると、私には思われる。私の信ずる神は、宇宙の永久に滅びない本質を念頭におき、且つ、宇宙の悲劇と美と価値とを念頭におく神である」。

形而上学的な神というものが認められるべきだとすると、それは形而上学体系そのもののうちから出る要求によって生まれるのである。ホワイトヘッドの主張によれば、現実的存在についてのかれ自身の分析が形而上学的神を必然的に要求するのである。最も一般的な基本的な議論は、まず『科学と近代世界』において述べられ、『過程と実在』においてたびたび繰りかえされているが、それは、現にある世界を他の可能な諸々の世界と区別して理由づけるためには、何か「先行」の条件、言い換えれば「限定の原理」(principle of limitation) が要求される、ということである。この「限定の原理」あるいは「具体化の原理」が、「神」と呼ばれるのである。** そして、この「先行条件」は『過程

と実在』において、神の「原始的本性」(primordial nature of God) とホワイトヘッドの呼ぶところのものである。「形而上学的に真なる主張は、神がこの創造性（すなわち世界過程）の原初の一例であり、従って、創造性の活動を規定する原初の条件であるということである」(『過程と実在』三四四頁)。

＊　最も簡潔な叙述の一つとしては『過程と実在』二四八頁。

＊＊　これらの表現は『科学と近代世界』においてはじめて用いられた。『科学と近代世界』(「神」に関する章)。

神についての説の最初の表明（『科学と近代世界』における神の論）は、抽象的可能性の限定のために一つの「根拠」がなければならぬという要求から生まれている。しかしながら、『過程と実在』におけるホワイトヘッドの議論は、そのような一般的な議論によって暗示されるよりも遙かに複雑な形をとるのである。形而上学的神の必要は、最も単純な現実的存在の分析においてすでに生ずる。ホワイトヘッドは現実的存在の分析を、多くの場合、神を引き合いに出さずに行なっているが、それは常に、そういう分析が一つの本質的な点で不十分であるという了解の下になされているのである。この不十分さは現実的存在の「観念的極」(conceptual pole) について著しく現われる。自然における心性のこの要素は、現実的存在がそれ自身の確定的な感受の形式、すなわち、実現された或る永遠的客体、に達するための手段なのである。そして、この観念的極は物的極によって、言い換えれば、他から継承された構造によって規定されることもできるが、また何か新たな形相、あるいは部分的に新たな形相によって、規定されることも出来るのである。他から継承した形相、言い換えれば「観念のうちに再現された物的形相」の方はさておき、基本的存在論的問題を生むのは、いかにして新たな形相が出現するか、という問である。新たな形相は物的極からは生じ得ない。物的極の内容は世界の過去の歴史の結果として確定せられている。してみると、心的極が改新の唯一の源である筈であり、ある意味で実際そうなのである。勿論、心的極において起こる改新は全く任意なものではない。というのは、心的極は物的極に多少とも密接に結ばれているからである。つまり、物的極は心的極を決定するのではないが、常に

或る程度条件づけるのである。ところで、物的極からのこのような制限（物的極は心的極を、アリストテレスの「質料」が「形相」を条件づけるのと似た仕方で条件づけている）を認めても、「新たな」形相、言い換えれば「新たな」永遠的対象が、心的極において確かに出現しているのである。しかしそれら新たな形相は、心的極に内在しているものではない。というのは、若し内在しているのならば、それら形相は新たなものではないであろうから。しかも、「単なる可能性」として「存在する」（exist）ことは、全く存在しないことである。そこで心的極はそれの改新の働きのための一つの源泉を必要とする。言い換えれば、一つの原始的本性、あるいは「原理」、あるいは神、を必要とする。*そして更に、存在することは現実的存在であることである、という存在論的原理に従い、神も一つの現実的存在でなければならない。『過程と実在』の形而上学には、現実的存在以外に「源泉」はあり得ないのである。

＊『科学と近代世界』においては「限定の原理」や「具体化の原理」が神と呼ばれているが、ホワイトヘッドがその時分に神を一つの現実的存在と考えたかどうかは明らかでない。「実体」と諸「様態」とのスピノザ的区別（二五五頁）は、神が一つの現実的存在であることを否定しているものと解釈できるであろう。しかしながら、『過程と実在』においても、神は普通の種類の現実的存在ではないのである。そのことは私が次にのべるところによって明らかになるであろう。

ホワイトヘッドは最後に、あらゆる現実的存在の観念的極と神との関係は、それ自身観念的関係でなければならぬという。すなわち、この原始的本性における神は、心的な働きをもち、世界過程において実現可能な永遠的客体を、現実への関連をもつ状態に保つ。ホワイトヘッドは神の観念的な機能と現実的存在の関係を言い表わすのに、永遠的客体の「等級づけられた関連」（graded relevance）という言葉を使っている。*このことの理由は、もろもろの永遠的客体の階層的関係についてのホワイトヘッドの考えにある。いま一つの永遠的客体が或る現実的存在のうちに実現されているとすると、その他の諸々の永遠的客体の多様の全体は、潜在的な諸々の可能性としてある。しかし、それらは、実現されている当の永遠的客体が、それらよりも一級高い複合性の段階に属する可能的要素であり、以下同様、

という意味において等級づけられている。こうして結局、永遠的客体の組み合わせの全体が関係することになる。しかしながら、当の実現された永遠的客体は、現にあるものとありうるものとの間に、断絶をつけている。そこで、現実に対する関連を等級づけて示す階層組織に対する神の神的直観が、その階層組織を、「真に」現実的関連あるものたらしめるために必要なのである。そういう神の直観がなければ、永遠的客体の階層組織は全くの無に帰するであろうとホワイトヘッドは主張する。「神がなければ実現可能な新しさというものはあり得ないであろう」（『過程と実在』二四八頁）。

さて、神は現実的存在であるという説を採用して、ホワイトヘッドは、「神の本性が二極をもつ」（『過程と実在』四七頁）、と主張する。まず、神の観念的極は彼の原始的本性によって示される。すなわち、それは、諸々の永遠的客体を現実的存在の世界への関連において等級づけられたものとして見る、神の「直観」である。かくて神は、その心的極において永遠的客体の全多様を「感受」する。ホワイトヘッドの言葉で言えば、「一々の永遠的客体は、神の観念的感受のうちに入り込んだ」のである（『過程と実在』三八二頁）。神は現実的存在のもつ現実化した諸形相ならびに、それら形相と他のすべての形相との相互関係、を心にもつのである。この点で、神は、プラトンのチマイオス篇における「デミウルゴス」のように、形相の世界を現実の世界に関係づけていると見られうる。*

＊　プラトンのチマイオス篇がホワイトヘッドの思想に影響していることは明白である。そのことはすでに『自然の概念』（一九〇〇年）において明らかに示されている。ハーヴァードで教えた幾年もの間ずっとホワイトヘッドの講義において、チマイオス篇は、受講者が読むことを要求された書物であった。

さて、神を現実的存在と考えることは、神が心的極とともに物的極をもつことを要求する。ホワイトヘッドは、神の物的極を「結果的本性」（consequent nature of God）と名づけている。神の「結果的本性」は、現実世界が神の本性全体に及ぼす結果である、と言ってよいであろう。神のこの側面は、神の「原始的本性」と結合せられて、神

の本性の「統一」(unity) を構成する。さて、この説によりホワイトヘッドは、神が世界過程を受容し、「経験」する、というのである。時間的秩序においてあるもの、あるいは生成するものは、神の原始的本性のうちなる永遠的対象の等級づけられた関連に対する、神の観念的な秩序づけに影響を及ぼすのである。*神の「原始的本性」は観念的であり、神の「結果的本性」は、神の原始的観念の上に織り出される神の諸々の物的感受である。

* 『過程と実在』七九頁「神は被造物としての性格をもち、常に具体化の過程のうちにあって、決して過去のうちにはないが故に、神は過去から反作用を受ける。この反作用が神の結果的本性である」。

さて、すでに見たように、一々の現実的存在は現実世界のあらゆる場所において、「価値づけ」(valuation) の作用によって構成されている。一々の現実的存在は、或る型の決定的な感受を実現している。それは単なる「好み」(aversion) や「忌避」(aversion) でありうるが、また、何か更に複雑な美的感受('aesthetic' feeling) でもありうる。それは言い換えれば、現実的存在の世界において実現されている「善」または「悪」であり、一々の現実的存在の自己形成的機能の結果なのである。かくてホワイトヘッドは一般に「欲求」(appetition) というものを、もっとも単純な現実的存在そのもののうちにさえも宿らせるのである。さて、現在存在する現実的存在の全体は、すでに成就せられたものの一つの「秩序」(神の「結果的本性」) を構成している。それは現在の中に、他の可能な価値秩序の実現の土台をつくり出しているのである。そして、そのような可能な価値秩序、すなわち、或る現実的意義をもつ秩序、を供給するものは、神の観念的本性である。神の観念的秩序づけの働きは、現存する価値秩序と、それをすでに前提した上で今後ありうべき価値秩序との双方を、考慮に入れなければならない。そこで例えば、宇宙に現在支配している空間的時間的秩序を認めると、「他の可能的秩序のあるものは現実的意義をもたず」、またあるものは、現実的生起の統一の感受において善いと感ぜられるか悪いと感ぜられるかはともかくも、現実的意義をもっている。かくして欲求は、神を、世界の創造的事業に加担させるのである。*

＊　一九三四年四月（?）の談話。「より広い経験への傾向は、秩序を必要とする。秩序の支持者が神である。というのは、もしわれわれが支持の力を取り去ると、宇宙を崩壊させることになるからである。どのような形の秩序も必然的ではない」。

問題をこのように述べてくると、言い換えれば、現実的存在の説をもとにして考えてくると、『科学と近代世界』における「形而上学的神」が、『過程と実在』においては、一層宗教的目的にかなうものとなっている理由がはっきりするのである。実際、『過程と実在』におけるホワイトヘッドにとっては、哲学は宗教に導くのである。「何故ならば、あらゆる秩序の超時間的源泉から与えられる真実な感受をもつものとしてのわれわれの在り方を凝視することによって、われわれは諸々の宗教が目指している新生と愛との主体的形式に達するのだからである」（『過程と実在』四七頁）。この文章は（ホワイトヘッドの他の文章もそうであるように）それだけで考えるとスピノザ主義の調子を帯びているが、明らかに宗教的感情を価値実現の形而上学に関係づけている。それ故、その形而上学は意識的存在者の感受のうちに経験的基礎をもっている。

尚その上に無意識な自然の段階において、形相や超時間的秩序への「誘い」は、絶えず現われている。この意味で神は自然を貫いて働き、具体化の過程においてある存在の一々に加担しているのである。現実的存在はみずからの形相に関しては、神の超時間的秩序に依存しており、他方またそれの個別的な実現の数々を、神の本性に寄与するのである。それ故、すべての現実的存在とは神的存在の「中」に存在する。現実存在の分析が導く結論はこのようなものである。

ホワイトヘッドの哲学的神学は一つの大切な点で伝統的な西洋の神学思想と異なっている。それは神が善の源泉であると同様に悪の源泉でもあるということである。このことは、あらゆる形相を「直観に描く」(envisage) ところの、神の観念的本性からして理解しうる。従って現実的存在の方から言えば、完全性を目指すことも不完全性を目指すことも等しく可能なのである。実現された経験の強度は必ずしも善の強度である必要はない、悪の強度というものも存

在するのである。善と悪とは、この「世界時代」(epoch)においては等しく実在的である。そしてホワイトヘッドの形而上学的体系は、善と悪とが未来の時代においても存在を続けるであろうと、暗示しているように見える。しかし「最善の世界は善の他の形相を排除する」といわれており、更にそれは悪の他の形相をも排除すると、つけ加えてよいであろう。*

(了)

* 一九三七年十月十日の談話。「神はその原始的本性において、秩序の源泉であると共に無秩序の源泉でもある。神は秩序を説明するのに必要であると同様に無秩序を説明するのにも必要である」。ホワイトヘッドは、『過程と実在』における「馬鹿げた楽天論」を、『観念の冒険』における「悲劇」の議論によって訂正しようとつとめた、と云った。

(筆者　スタンフォード大学哲学教授)
(訳者　京都大学文学部〔哲学〕教授)

# THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

*The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article.*

## Introduction to Whitehead's "Process and Reality"

*by* John D. Goheen

Whitehead's *Process and Reality* stands as a major work in speculative metaphysics of the 20th century. The difficult conceptual scheme which it expounds has its origin in problems shared by many philosophers at the beginning of the century. New developments in logic and physics seemed to require fundamental adjustments on the conception of nature. The relation of theoretical concepts to experience and the place of mind in nature were equally prominent problems. Besides these current problems Whitehead was stimulated by a rich scientific and philosophical tradition both as a source of ideas and as a point of reference for criticism and definition of his own conceptual scheme.

Central to Whitehead's thought is the distinction between the immediacy of experience, its event-like character, unique and particular, and that of the discriminable characters of experience which are repeatable, recurrent forms or "eternal objects". These two elements together with a general principle of relatedness ("prehension") constitute the ground for Whitehead's ontology. Through the elaboration of these distinctions Whitehead sought to preserve the basic insights of both empiricism and rationalism. This involved a fundamental revision of Humean phenomenalism as well as of the dualistic rationalism inherited from Descartes.

The present essay develops some of the themes of *Process and Reality* particularly relevant to these issues.